

勿凝学問 292

いつまでもあると思うなその給付
財源の裏付けのない社会保障給付の経済効果とは？

2010年3月24日
慶應義塾大学 商学部
教授 権丈善一

先日、テレビをみていたら、「みなさあん、生き辛いこの時代、生活防衛は、キャッシュ。借金なんか絶対ダメ、とにかく現金を手元においておくことが大切です！」と、経済評論家が言っていた。まあ、間違えていないと言えば間違えてない。

でっ、今週の『女性セブン』は、子ども手当は、「いつまでも支給されると思うな！」「いつまでも支給される前提で支出を増やすな！」と檄を飛ばして、つまりは貯金しろと言っている。ESSEにも似たような話を書いてあったそうな——情報源はひみつ。

要するに、こういうことだな。

財源の裏付けのない子ども手当は、将来の給付額に不確実性を付与することになる。家計は、将来にわたる子ども手当の期待受給額に基づいて行動を選択するとすれば、安定財源が確保されておらず、将来の受給額が不確実な子ども手当に対して、一旦膨らんだ支出を元に戻す困難さを知っている家計が合理的に行動すれば、子ども手当を、子どものための消費をはじめ自分のための消費にも使わずに、貯蓄に回すインセンティブを強く意識することになる。その結果、子ども手当は、子どもの健全な育成に役立つこともなく、景気対策として役立つこともなく、ただ、貯蓄、現金として保蔵されるだけになる。

まあ、銀行に貯金したら国債を買われて、国債が暴落したら、銀行預金も危ないから、金などの貴金属を買っておいた方がいいのかもしれないけどね。

同じ理屈で説明できる他の現象もある。

財源の裏付けのない介護職員処遇改善交付金は、将来の給付額に不確実性を付与することになる。一旦膨らんだ賃金を元に戻す困難さを知っている介護事業者が合理的に行動すれば、介護職員処遇改善交付金の申請を躊躇することになる。

今の財政状況、そしてあの首相の下では、国民は「いつまでもあると思うなその給付」と考えるのは、無理もあるまい。

ところで、安定財源の裏付けのない社会保障給付であるために、期待受給額が低くなり、その結果、ミクロの経済主体が引き起こす様々な現象は、リカード＝バローの等価性定理とも違うし、だいたい僕は等価性定理は、さすがにあれはウソだろうと思ってる——以前書いた、次の文章がいいだろうな。

[経済成長と医療政策、これを議論する前提としての国家財政の持続可能性](#) 125 頁

日本医師会『医療政策会議報告書』

「国民が国家財政の持続可能性を疑っていない場合」は、積極的社会保障政策を賄う財源は、負担増であれ赤字国債であれ、有効需要の増加という効果が期待できることになる。もっとも 2003 年時に積極的社会保障政策を論じた時には、負担増のための税・社会保険改革とセットにして議論を展開していたから、私の中では赤字国債で賄う積極的社会保障政策はまったく想定していなかった。しかしながら、財政規律なき積極的社会保障政策を否定する言葉を書いてはいなかった。それに当時は、赤字国債で賄う積極的社会保障政策を完全に否定するほどの状況でもなかった。ところが今は、「国民が国家財政の持続可能性を疑っている」という条件の下で、社会保障政策について論じなければならない段階に入っているように思えるのである。この条件の下では、いかに社会保障政策を積極的に展開しても、その財源を赤字国債に依存しているようでは、社会保障給付の充実によって期待される有効需要の増加は見込むことはできない。要するに、財政規律なき積極的社会保障政策では、国民は安心して消費を増やそうとはしないのである。